

Title	「絵本の読みあいにおける大人の役割とは?： 幼児と母親の絵本の読みあい場面の観察研究からの示唆」報告（2014 年度 聖学院大学総合研究所：【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 子どもの育ちと絵本研究 会主催 絵本研究講演会）
Author(s)	齋藤，有
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :16-16
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5257
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014年度 聖学院大学総合研究所
 【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト子どもの育ちと絵本研究會主催 絵本研究講演會
 「絵本の読みあいにおける大人の役割とは？」
 ～幼児と母親の絵本の読みあい場面の觀察研究からの示唆～」報告

本研究講演會では、母親と幼児期の子どもの間でなされる絵本の読み合いを対象とした觀察研究および実験研究によって得られた知見をふまえ、幼児期の絵本の読み合い場面において大人が果たす役割について議論した。

まず、本研究の出発点として、岡本夏木著「幼児期—子どもは世界をどうつかむか—」（岩波新書、2005）に触れた。現代の子どもは早くから効率を求める大人社会の強大な圧力にさらされて、出来事とじっくり向き合い、そこにある意味を自分自身で見出そうとする力が十分に育まれていないという岡本氏の指摘から、講演者は、日常的に母親と子どもの間で行われている絵本の読み合いは、子どもが絵本の世界を繰り返し旅し、そこにある意味を時間をかけてじっくりと見出す体験のできる格好の機会なのではないかと考え、そこでの母子相互作用に着目をして研究を行ってきたことを紹介した。

そして、絵本の読み合いの觀察研究では、子どもが率直な驚きや疑問を呈する行動を、子ども自身が絵本の世界を意味づけようとする試みと考えて抽出し、その驚きや疑問に対する母親の反応を分析した結果を発表した。そこでは、子どもの驚きや疑問に共感し、子ども自身に考える余地を残すようなものと、子どもの驚きや疑問に対して答えを明示するようなものがあること、次の読み合い場面の觀察からは、子どもは、母親から共感的で考える余地のあるような反応を得た同じ箇所、繰り返し自発的に反応し、その驚きや疑問を追及していくことが明らかになった。このような実証データから、幼児期の絵本の読み合い場面において、子どもの意味づける力を育み、援助するためには子どもの疑問や驚きを大事にする大人の関わりが重要であると指摘した。

また、觀察研究において、幼児期後期になると、子どもと母親の読み合い中の言語的な相互作用が減少し、絵本に書かれたテキストを読む朗読中心になることも明らかになった。そこで講演者は、朗読の質による子どもの物語理解の違いについて検証した実験研究を紹介した。すなわち、大人が感情をこめ、抑揚のある朗読をした場合に、感情がこもらず、抑揚のない朗読をした場合よりも、子どもの物語理解、特に、登場人物の気持ちの理解が促されたという結果を紹介し、母親のこまめな抑揚のある朗読が子どもの世界を意味づける援助になっていることを指摘した。

最後に、現在行っている乳児期における読み合い場面の觀察研究のデータの一部を紹介し、乳児期における読み合いは、最初、絵本を読みたい母親と、絵本を食べたい子どもの間で葛藤があるが、次第に母子相互作用が調和的になり、絵本を読み合うようになることから、絵本が子どもにとって意味あるものになっていく発達のプロセスについての検証を今後の課題として発表を終えた。



左上：齋藤 有先生（講演者）

右下：石川由美子教授

（文責：齋藤 有 [サイトウ・ユウ] ルーテル学院大学総合人間学部助教）